

地域若者サポートステーションに集う「若者」の生きづらさについて

—不安や希望に関する利用者アンケートの質的分析から—

津田容子（東京大学大学院教育学研究科）

1. 背景と目的

・2000年以降、ひきこもりやニート、フリーターといった就労に躓く若年層が問題となり、若者支援の必要性が叫ばれてきた。そうした若年無業者の支援を担う機関として2006年に開設されたのが、地域若者サポートステーション（通称：サポステ）である。

・サポステは、厚生労働省の委託事業として全国177か所（2023年度）に設置され、15歳～49歳までの働くことに悩みを抱えた人に対して個別・継続的な支援を行う。また、その支援を通じて、不利な事情を抱え、社会から排除される若者らの存在を発見してきた（宮本, 2015）。

しかし、政策や法律のもと、その事業枠組みは都度変更・拡大され、対象者層や支援ニーズに関する知見の蓄積は乏しい

研究目的 サポステを利用する「若者」が抱える不安や希望、彼らが抱える生きづらさの特徴を明らかにし、それらに伴う支援ニーズを検討する

臨床的意義 支援の質の向上、支援内容の充実に寄与する

2. 方法

紙面・WEBでの記述式アンケート調査

調査対象 筆者の所属団体が運営するA市の地域若者サポートステーション（Aサポステ）の利用者、15歳～49歳の者。

※Aサポステの特徴：職員数25名、年間新規利用者数は約450名、年間総利用者数は約15,000名（2022年度）と全国最大級の規模・実績を有する。

調査方法 匿名のアンケート形式。冒頭に「注意事項」のチェック欄を設け、データ利用に同意の上で回答を行った。

募集方法 2022年7月25日～8月31日に事業所内に紙面アンケート（WEB回答も可）を配架し、利用者の自由意思で回答を求めた。

分析方法 自由記述の回答を切片に分け、KJ法的なカテゴリ分析で整理・図式化した。

*東京大学倫理審査専門委員会による承認（審査番号：22-204）

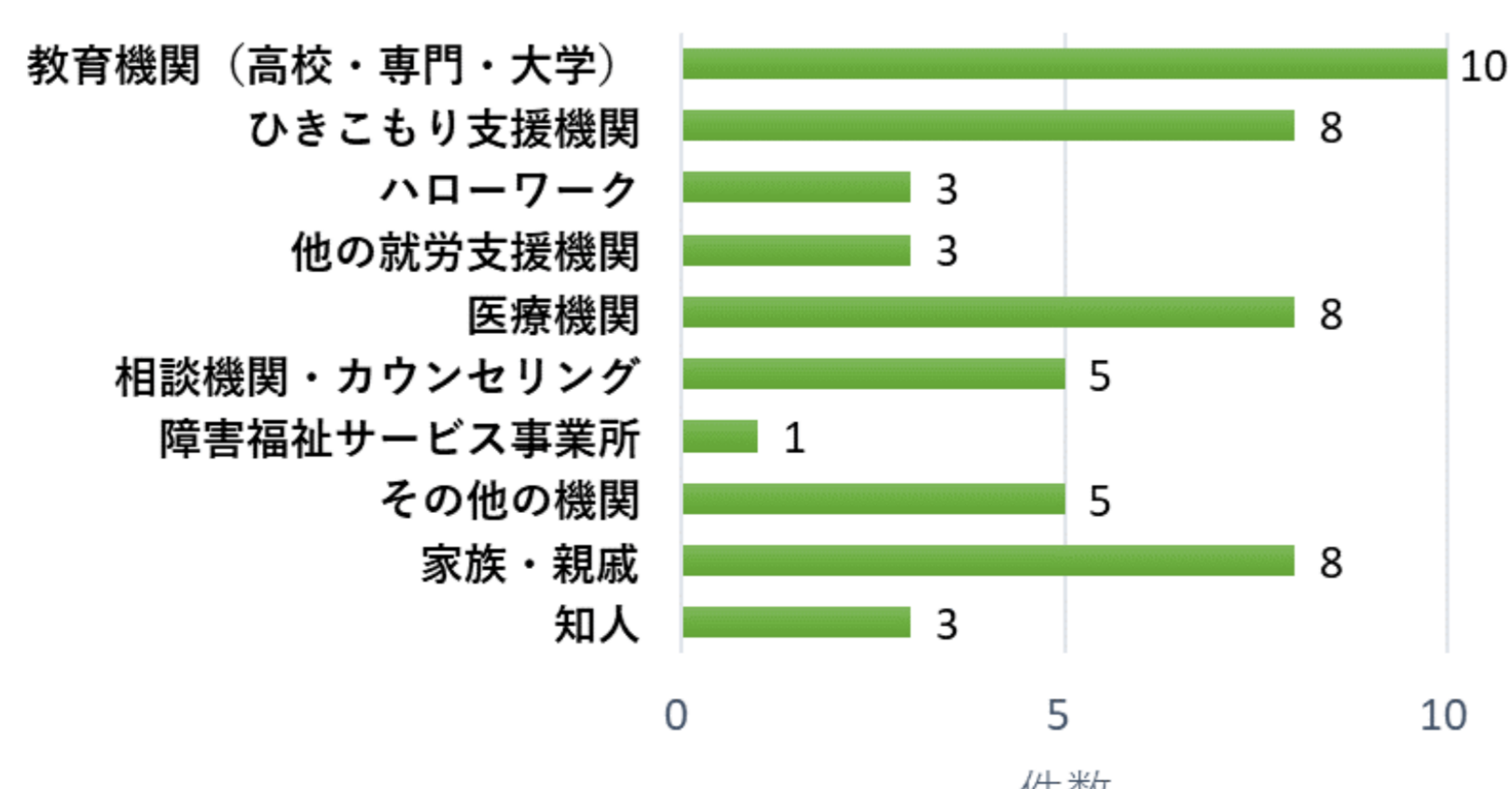
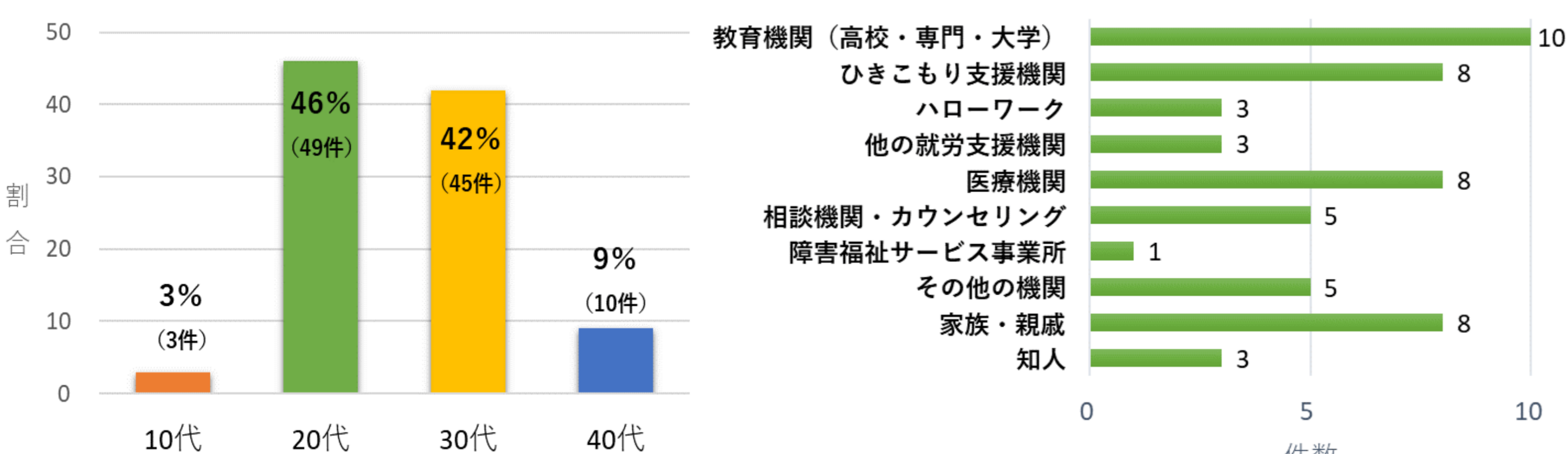
アンケート項目（全6項目）

- ① 年代（10～40代、4件法）
- ② サポステを利用し始めたきっかけ
- ③ サポステの来所前、どんなことに悩んでいましたか
- ④ 今、自分の将来のことで感じている希望や不安
- ⑤ 上記4の回答について「もっとこんなサポートがあったらいいのに」と思うこと
- ⑥ 社会に対して「もっとこうなってほしい」と思うこと

3. 結果① 年代・来談経緯

回収数 107件（紙面：47件、WEB：60件）*「同意しない」1件を除外
来談経緯 項目2「きっかけ」の具体的な記載より抜粋（計72回答）

※他機関からの紹介（図2）のほか、インターネットやチラシ、立ち寄り



4. 結果② 利用者が抱える不安

・来所以前は、対人場面や社会に出ること、就職活動、自身の就労能力に対する不安があり、来所以降は「仕事に就けるか」の就職への不安と同時に「仕事を続けられるか」との就職後の定着にも不安を抱いていた。

・将来に向けては（親亡き後も）「生活できるか」「孤独・孤立への不安」の一方、動けていない自分に対する「自己嫌悪」の思いも見られた。

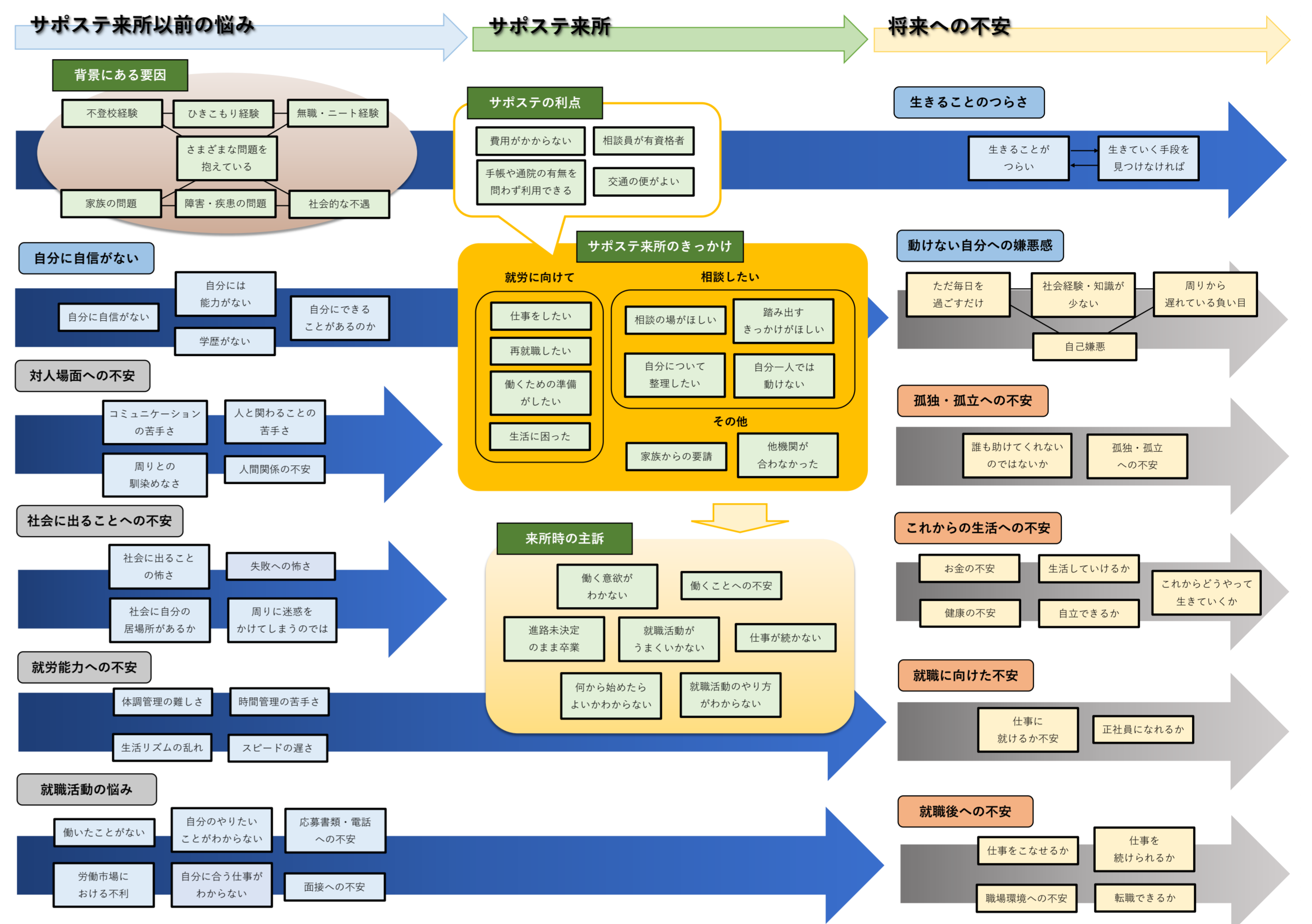


図3 Aサポステ利用前から将来にかけての「不安・悩み」

5. 結果③ 将来に対する希望

・将来に対しては、生活と就労の両面における充実を望んでいた。

・将来に希望をもつ上では、現在の活動状況（就労やその他）を問わず、「今の自分でもよいと思えた」という自己の肯定が前提となっていた。

→ 自己の肯定には、目的的な活動経験に伴う、変化への見込み・見通しが重要。

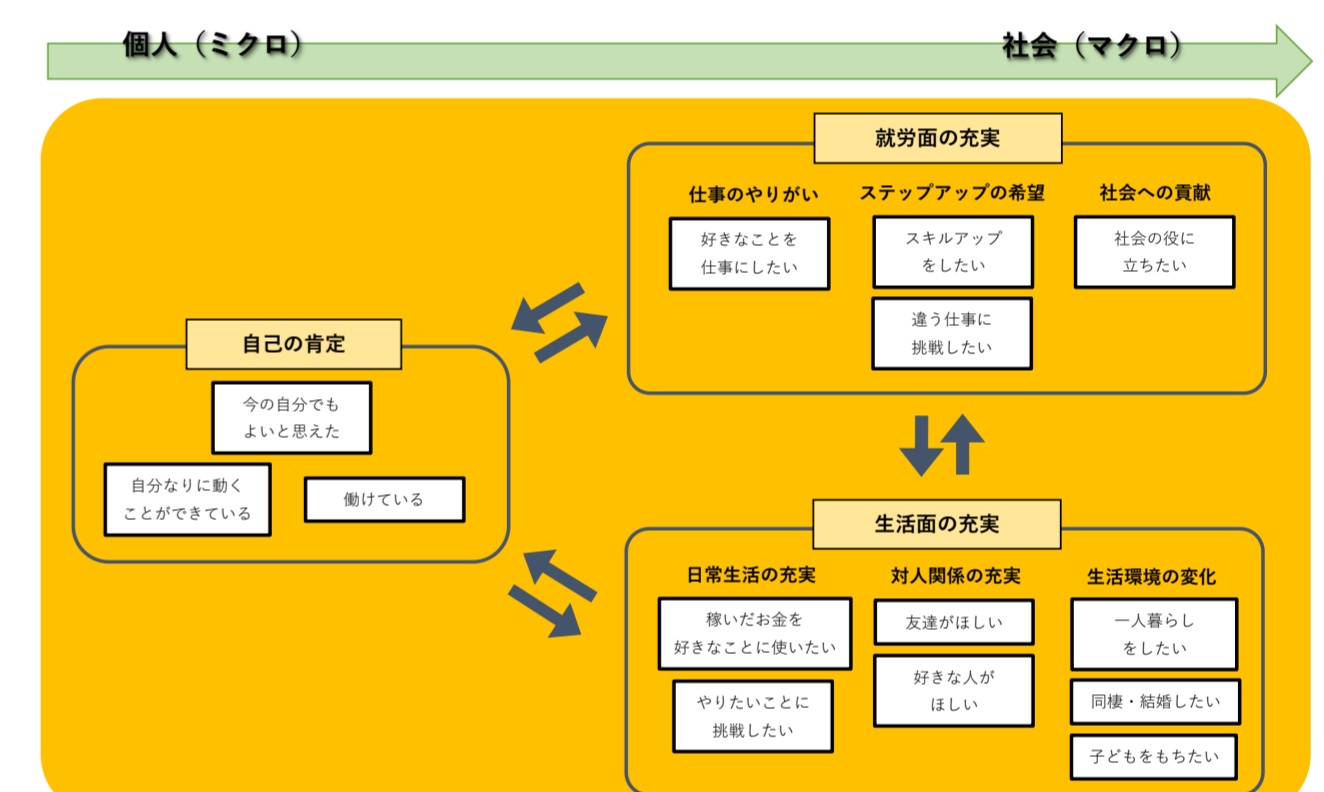


図4 将来に対する希望

6. 結果④ 求めるサポート・社会に対して望むこと

・適切な情報提供の他、社会制度や仕事について知る機会、さまざまな立場の人と話す機会を求めていた。また、相談支援による変化として、「自分らしさに気付く・活かす」「自分で道を選択する」が挙げられた。

・社会に対しては「多様性」「一人ひとりの個性・能力」「どんな人でも…」など、寛容かつ柔軟なまなざしを求める声が複数見られた。

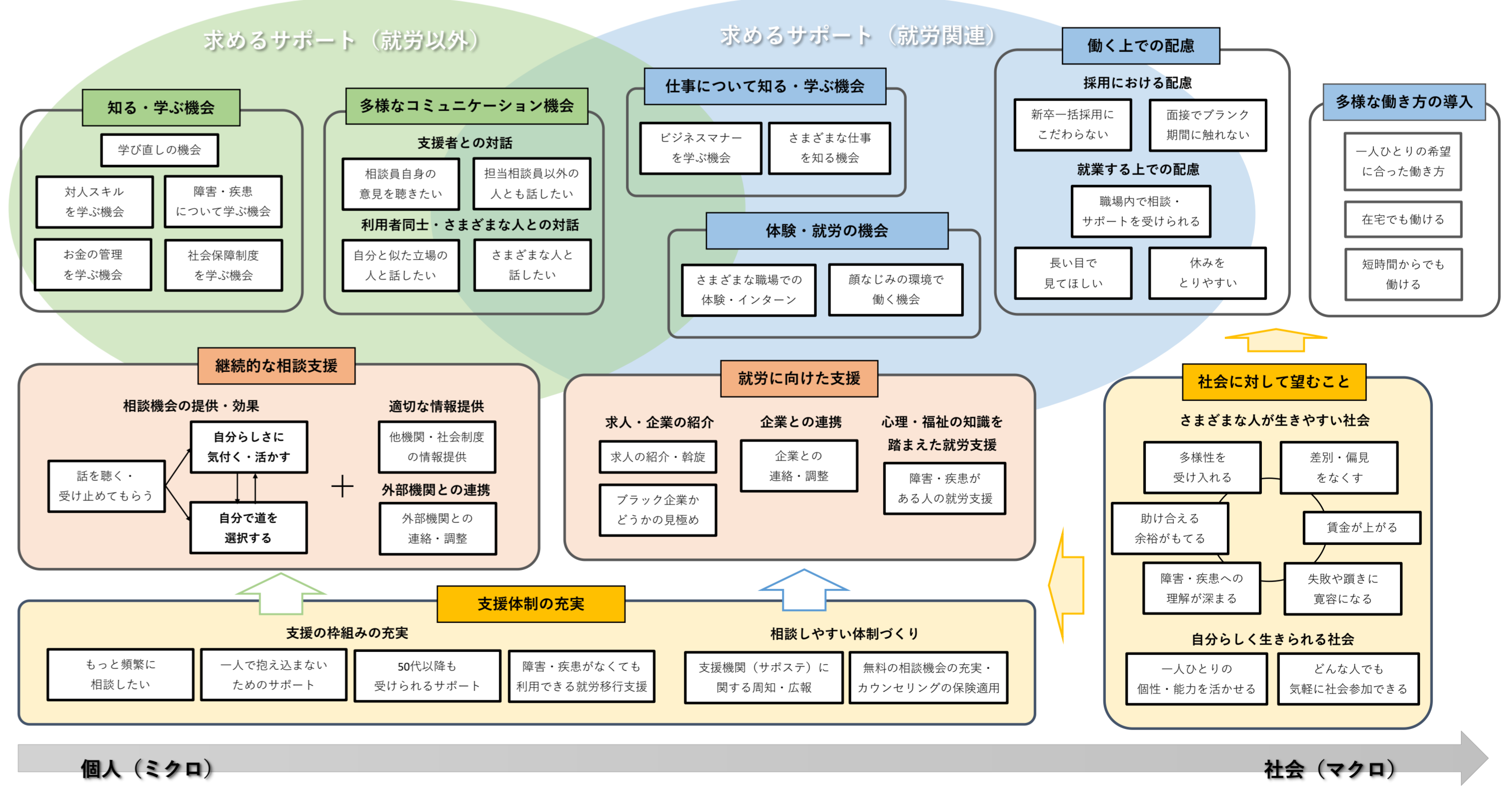


図5 求めるサポート・社会に対して望むこと

7. 総合考察

・利用者が抱える生きづらさ（不安・悩み）は、サポステの来所前後で大きくは変わらない。しかし、「ただ過ごすだけ」「動けない」日々から、相談などの支援を通じて、①就労や社会参加に向けて目的的に活動する経験を積む中で、②変化への見込み・見通しが持てるようになり、「自信がない」「自己嫌悪」などの否定的な自己イメージも抱きつつ、③現在の自分を肯定し、自分なりの人生の充実を望むようになる様子が見られた。

・一方、社会に望むことには、多様な人のあり方に対して寛容であってほしい、躓きのみでなく個性・能力といった肯定的側面からも自分を理解してほしいとの思いが窺えた。求めるサポートでも「自分らしさに気付く」「自分で道を選択する」ための相談、知識やスキルの習得機会などの個人レベルから就労・社会参加の機会拡大といったマクロな視点まで、自分自身や社会の充実に向けた主体的な希望を有することが明らかとなった。